

びあがる「ロジャツ」について考察してみたい。

「ロジャツ」は、器のなかですべての要素がとけあう「るつぼ」ではない。すなわち「ブルーラル」な要素がすべてとけあって国民統合がなされている状態ではないのである。乱切りされたそれぞれのフルーツや野菜は「エスニック・グループ」の比喩表現のようではあるが、それぞれのフルーツや野菜はそれだけでは意味をなさない。それゆえ「ロジャツ」は、それぞれの「エスニック・グループ」が統一体とみなされる多文化主義とは趣を異にしているとみてよいだろう。「ロジャツ」は国民国家という一つの皿に入れられ、共通の国民的理念とでもいうべきソースでむすびつけられていると解釈することができる。しかしながら、タンたちが着目しているのは皿やソースなどに表現される国民的な結びつきよりもむしろ、「ロジャツ」がもつ大衆性や雑種性のようである。つまり「ロジャツ」は政府が積極的に保護したくなるような国民的伝統食ではなく、どこまでいっても大衆的な食べ物だ。このような雑種性や非正統性は、カリブ海地域の文学者たちが提唱した「クレオール」概念にも共通するところがある。

以上のように「ロジャツ」はいまだ概念としては錬成されていないが、マレーシアにおけるアイデンティティのありようを直観的につかみとった表現であると考えられる。マレーシアにおけるアイデンティティ研究は、これまで他の地域において醸成された枠組みや概念を流用していくことが多かったが、「ロジャツ」が比喩表現を超えて概念として精錬されるならば、それこそシャムスのいうように「マレーシア社会科学の新局面を開く」ことになるのではないだろうか。

第5回国際マレーシア学会議における JAMS 会員による報告

左右田直規

すでに井口由布会員から第5回国際マレーシア学会議(MSC5)の総括をしていただいたので、ここでは、同会議における JAMS 会員による報告をご紹介します。複数のパネルが同じ時間帯に開かれていたこともあり、すべての会員の口頭発表と質疑応答を聞くことができた訳ではない。そこで、各会員の報告の要旨を発表順にまとめることをもって、レビューに代えさせていただきます。

まず、*Malaysian Political System & Leadership* と題されたパネルにおける山本博之会員による報告“*Regional Challenge and Central Adjustment to Federalism in Malaysia*”は、サバ州と中央政府との関係に焦点を当てて、マレーシアにおける federalism の展開を論じたものである。同報告によれば、1963年のマレーシア形成の際に、バンサ(bangsa)を基盤にした政党の連合政治(一種の“federalism of bangsa”)を特徴とするマラヤの政治システムは、民族をめぐる状況が異なるサバには、完全なかたちでは導入されなかった。

連邦形成時に相対的に高度な自治権を与えられ、それ自体がバンサに近い地位を得たサバ州では、連邦政府の影響下でのマレー・イスラームへの同化に対する懸念から、カダザン人政治指導者を中心に、「サバ人のためのサバ」を旗印にして、州の権利を擁護する運動が展開された。しかし、1990年代になると、マラヤの政党のサバへの進出によって、サバはマラヤ型のバンサを基盤にした政党政治システムの中に取り込まれるようになり、マレーシアにおける federalism の再編成をもたらすに至ったという。

Culture: Representations and Meanings (1) のパネルでは、舛谷鋭会員が“A Study of Malaysian Chinese Literature by Oral Historical Approach”と題する報告を行った。同報告では、マレーシアとシンガポールにおける華語の口述史料の収集・出版をめぐる概況に関して説明がなされ、報告者自身による口述史料収集の成果の一端も紹介された。

Malaysia-Japan Relations: Re-Visiting the Past, Re-Visioning the Future のパネルでは 2 人の会員の研究成果が発表された。原不二夫会員による報告“Japanese Economic Activities before the Pacific War”は、太平洋戦争前のマラヤにおける日本人の経済活動を分析したものである。同報告によれば、戦前の日本人によるマラヤへの経済的進出は、肉体労働者（苦力）の時代（1890-1920年）、小農の時代（1920-1930年）および資本に伴う移民の時代（1930-1941年）ごとに異なった様相を呈している。報告者は、これまで等閑視されがちだった初期の労働移民に特に注目し、彼らの大半が現地の苛酷な環境を克服できずに帰国を余儀なくされたこと、彼らが（民族の別を問わず）現地の労働者を日本人労働者より勤勉だとみなしていたことなどを指摘した。

同じパネルでの吉村真子会員による報告“Malaysia-Japan Economic Relations: Japanese Companies and Localisation”は、日本のマレーシアへの直接投資と日系企業の現地化に焦点を合わせて、1980年以降の日本・マレーシア経済関係を考察したものである。同報告は、マレーシアの日系企業がトップレベルの経営者を日本人スタッフで充当しようとする傾向が強く、現地従業員や現地企業の技術水準に対する低評価などの要因から、現地への技術や技能の移転を困難だとみなしがちだということを、各種のデータをもとに論証した。こうした現状分析に基づき、日系企業が現地の社会と調和し、現地企業を日系企業のネットワークに招き入れ、経営の現地化と技術の移転を促進する必要があることを、報告者は示唆した。

最後に、Knowledge Production & British Colonialism と題するパネルの井口由布会員による報告“University as an Institution of Colonial Knowledge: The University of Malaya and the Socio-Economic Development of Malaya”は、植民地主義的知の制度化という文脈の中でマラヤ大学の設立を再検討したものである。同報告によれば、マラヤ大学設立計画の中では、行政・技術官僚や専門家の育成を目指して、教養教育よりも専門技術教育や職業訓練の重要性が強調され、また、エスニック・グループ別研究科の創設を通じてエスニック問題の合理的解決が図られた。この事例からは、知を権力へと変換する国家的装置としての大学の姿が浮かび上がってくる、と報告者は論じた。

今回の MSC5 では、2 年前の MSC4 に比べると、JAMS 会員による報告の数はやや減少したようである。そのような中で、今回の会議で報告された会員は、いわば MSC の常連として度々報告をなさってきた方々ばかりである。たゆみなく研究成果を披露し続ける、その真摯な姿勢には頭が下がる。他方、前回の会議で目立っていた大学院生の会員による報告は、今回はなかった。博士論文の執筆中であつたり、現地調査の最中であつたり、諸々の理由でタイミングがあわなかったのだろう。他方、現地調査中の大学院生を中心に、相当数の若手会員が報告と討論を聴講されていた。これらの方々が、次回以降の MSC で最新の研究成果を発表して下さることを期待したい。それと同時に、JAMS の創設期を担われてきた世代の会員の方々にもぜひご報告いただき、日本におけるマレーシア研究の水準を示していただければ、と思う。今回は報告をサボった筆者が、このようなことを申し上げる資格はないのだが。

ジャウイ文書研究会国際ワークショップ報告

—International Workshop "Re-examining the Jawi Tradition in Southeast Asia"—

菅原由美（天理大学）

2006 年 9 月 23 日、京都大学地域研究統合情報センター 3 階会議室において、同センター共同研究会「イスラム教圏東南アジアにおける社会秩序の構築と変容」及び科研費プロジェクト「イスラム教圏東南アジアにおける学知の制度化と実践」及びジャウイ文書研究会の共催で、ジャウイ研究国際ワークショップが開催された（ジャウイ文書研究会としては第 29 回研究会にあたる）。内容は以下の通りである。

Omar Farouk 氏（広島市立大学）が司会となり、まず日本のジャウイ文書研究会によってこの間行われてきた研究活動概要が紹介され、これまで世界でもあまり顧みられてこなかったジャウイ研究の必要性を主張し、ジャウイ関連研究史の再検討とその残された課題について考えるために、このワークショップを開催したことが説明された。

まず Adnan Nawang 氏（Universiti Pendidikan Sultan Idris）が、「*Jawi and the Malays*」というタイトルで、「ジャウイ」とイスラムとマレー人の関係について、マレー世界の歴史に沿った概説をおこなった。同世界のイスラム化の歴史から始まり、英領マレーにおける教育とジャウイの使用の歴史まで概観し、現在のマレーシアにおけるジャウイの意味についても説明した。彼はマレーシア以外の東南アジア島嶼部諸国（インドネシア、ブルネイ、シンガポール）におけるジャウイの位置については研究が不足していると述べた。次に、西尾寛治氏（東洋文庫）は、「*The Development of Jawi Concept: Jawi as Categories of People*」というタイトルで、「ジャウイ」という概念の歴史的变化を、辞書、旅行記など様々な史料を